

## *Intelligibility, Oral Communication, and the Teaching of Pronunciation*

John M. Levis 著 (2018)

Cambridge University Press 304pp.

杉内 光成

獨協埼玉中学高等学校

効果的な発音指導によって、学習者の発音が聞き手に理解され得るレベルまで到達させることができる。教育現場では「時間があればやります」という扱いをされることの多い発音指導であるが、発音はスピーチやリスニングに多大な影響を及ぼすため、必要不可欠である。発音指導となると、全ての発音項目（音素）を同じように教えることが多い傾向にあるが、そのような現状に対して、*intelligibility* という概念に焦点を当てた発音指導が効果的であると提唱していくのが本書である。本書は、発音教育における *intelligibility* を向上させるための指導について考えるものであり、4つのパートに分けて構成されている。

パート 1 では *spoken language* を教授するときの枠組みについてまとめており、*intelligibility*, *comprehensibility*, *spoken language* といった中心となる概念について（第 1 章）、そして発音教育において優先すべき事項について、先行研究をまとめながら説明されている（第 2 章）。*intelligibility* とは聞き手が話し手のことをどれだけ理解したかを表す指標であり、*comprehensibility* は聞き手が話し手をどれくらいの難易度で理解ができたかを示すものである。また、*intelligibility* と言っても単語レベル（分節音や強勢）と文レベル（超分節音など）の 2 つに大別でき、それぞれが密接に *intelligibility* や *comprehensibility* に関わっている。多くの文献を参照しながら、どのような発音項目が *intelligibility* や *comprehensibility* に大きく寄与しているかを調べるには、このパートを参照すべきだろう。

2 つ目のパートは単語レベルのエラーと *intelligibility* について扱われている。第 3 章では単語レベルの *intelligibility* について書かれており、第 4 章では子音結合における *intelligibility* について、強勢と *intelligibility* の関係性について第 5 章で扱われている。さらに、次のパートでは対話レベルのエラーと *intelligibility* をテーマにしており、リズムと *intelligibility*（第 6 章）、*intelligibility* の観点から見たイントネーションの役割について説明をしている（第 7 章）。このように、分節音、子音結合、強勢、リズム、イントネー

ションなどと *intelligibility* との関係について、一つひとつ文献を紹介しながら、詳細に分析をされている。例えば、強勢と *intelligibility* の関係を見る上では、強勢の役割の説明から始まり、単語を正しく認識することについて、英語の母語話者が認識している強勢という概念について、英語母語話者が正しい強勢が置かれているか否かを判断するときに影響を及ぼす要素などについて詳細に書かれている。この 2 パートだけでも十分に読み応えがあり、発音指導の発展のために大切な要素を学ぶことができるだろう。

最後のパートは、*intelligibility* を教えたり研究したりするための情報をまとめている。第 8 章では *intelligibility* を基盤とした指導の原則について触れており、第 9 章では *intelligibility* を基盤とした指導が教室ではどのように行なわれるべきか提言がなされている。そして、最後の第 10 章については *intelligibility* 向上のために教えるべきこととそうでないことの区別について簡潔に述べて、本書を締めくくっている。

本書で特筆すべき点として、*intelligibility* を向上させるために、パート 4 において指導項目の優先順位を明示していることが挙げられる。例えば、単語の発音を基本として考えた指導プランでは、More important pronunciation to teach として “Useful Words、Potential taboo words、Professional vocabulary、Personal names” (p.243) の発音が挙げられており、Less important pronunciation to teach として “Words you are unlikely to use, learning vocabulary pronunciations just because you want to improve your vocabulary” (p.243) と紹介している。以上の形式で、Fluency (流暢さ) を向上させるための指導プラン、子音の発音指導プラン、母音の発音指導プラン、子音結合の発音指導プラン、強勢の指導プランなどについて、それぞれに指導項目の優先順位を提示されている。

そして、Intelligibility-Based Teaching を支えるものとして、6 つの原理を掲げている。

1. コミュニケーションに明らかに関係のある発音項目は優先されるべきである。
2. メッセージを理解する際に障害になるような発音ミスは優先されるべきである。
3. 重要な言語項目 (lexical items) の発音は優先されるべきである。
4. 機能的負担 (functional load) の大きい単語の発音は優先されるべきである。
5. よく間違われる発音項目は優先して指導されるべきである。
6. 学習し易い発音項目は優先して指導されるべきである。 (p.186 参照)

本書で掲げられている Intelligibility-Based Teaching は「時間がないなか、発音の何を教えるべきだろう」と途方にくれている現場の教員に対して、論理的背景をもった汎用性の高いアドバイスとなっている。コミュニケーション力育成のための授業における発音指導を考えるための基本となる 1 冊であるだろう。